

インクワイアリー・サークル —リテラチャー・サークルからの発展を中心に—

From Literature Circles to Inquiry Circles

足 立 幸 子
Sachiko ADACHI

1. 問題の所在

平成29年及び30年の小中及び高等学校学習指導要領改訂では、「資質・能力」の育成を目指し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めることが求められている。このような中で、国語科においても、探究を基にした学習が必要となってきた。

ことばの教育の歴史から見た探究学習の系譜は、幸田国広によれば、明治末期から大正期の木下竹次の『学習原論』、山路兵一の「遊び」への着目、さらに大正期から昭和初期の滑川道夫・峰地光重・村山俊太郎の調べる綴り方・集団制作、戦後新教育における大村はまらの単元学習、平成10年の学習指導要領「総合的な学習の時間」などに遡ることができ、繰り返しその重要性が論じられてきているという(幸田, 2020, pp.8-14.)。

このような古くて新しい課題に取り組む際に、海外の先行例を参考にすることは一つ有効な方法であると考えられる。事実、幸田の挙げている例も様々に明治期・大正期・昭和戦前・戦後などの各時代に直接的・間接的に海外からの影響を受けたものである。海外には海外独自の文脈もあるが、冒頭に挙げた学習指導要領の改訂の趣旨に「グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により……予測が困難な時代となっている」(文部科学省, 2018, p.1) とあるように、グローバル化や技術革新など海外の国と共有する現代的な状況もあると言えるからである。

そこで、本稿では、探究を基にした学習の1つとして、アメリカのステファニー・ハーベイとハーベイ・ダニエルズによる「インクワイアリー・サークル」(直訳すると探究サークル)を取り上げる。ハーベイ・ダニエルズと言えば、足立(2004)によって取り上げられたリテラチャー・サークルが日本でも知られているが、リテラチャー・サークルの第2版(Daniels, 2002)出版の7年後に「インクワイアリー・サークル」が『読解と協同』(Harvey & Daniels, 2009)というタイトルの本にまとめられている。まず、インクワイアリー・サークルとは何かを示した上で、インクワイアリー・サークルがリテラチャー・サークルからどのように発展したのかを明らかにして、我が国で探究を基にした国語科学習の手がかりを得ることを目的とする。

2. インクワイアリー・サークルの概要

先程2009年にインクワイアリー・サークルがまとめられたと述べたが、これは『読解と協同：インクワイアリー・サークル活動中』(Harvey & Daniels, 2009)というタイトルの本(以下、初版とする)である。翌年の2010年に授業風景を撮影したDVD 2枚(小学校用と中・高等学校用)が販売されている。さらにその5年後の2015年に改訂版『読解と協同：好奇心、取組、理解のためのインクワイアリー・サークル』(Harvey

& Daniels, 2015)が出版されている(以下、改訂版とする)。この間、アメリカでは様々な州に共通して指導されるべき内容が各州共通基礎スタンダード(Common Core State Standard)として示され、これを経てもなお、インクワイアリー・サークルの活動の重要性は認められたととらえることができる。このような経緯から概要については、主に改訂版の方から引用する。

(1) インクワイアリー・サークルの原理

インクワイアリー・サークルとは、サークル(小集団)で、インクワイアリー(探究)を行うということである。その原理については11点が挙げられている。

- ①生徒の好奇心・疑問・興味に基づいて話題を選択する。
- ②子供が関係する本物の問題について、深く掘り下げる。
- ③小研究チーム、グループ、タスクフォースなどといった柔軟なグルーピングを行う。
- ④注意深く差異(differentiation)を伴う、同質ではない(heterogeneous)、能力別でないグループを編成する。
- ⑤生徒の責任と仲間のリーダーシップを必要とする。
- ⑥有能な読者／思考者／研究者の方略を使用する。
- ⑦教師自身が読んでいる時、書いている時、考えている時にどのようにしているかをモデリングしたり、研究する過程を見せたりする。
- ⑧多ジャンル、多レベル、多文化、マルチメディアなど、多様なソースを用いる。
- ⑨考えを統合したり知識を獲得したりして、単なる事実の発見を越えるようにする。
- ⑩共有したり、公刊したり、生産したり、実行したりして、学校やコミュニティーの知識を有効に利用する。
- ⑪子供の学習を、各州共通スタンダード及び校区のスタンダードとを関係づけたりを適合させたりするようにする。

(Harvey & Daniels, 2015, p.16)

生徒はstudentを、子供はkidを訳したものだが、インクワイアリー・サークルは小学校低学年から高校生までの幅広い年齢を対象としている。

以上のようにインクワイアリー・サークルでは、子供自身の疑問から出発し、グループを作ってその疑問を協同して調べ、単なる発見以上の結果を得てそれを公に発表するというものであるが、州や校区が要求している学習内容にも適合するようにするのである。

(2) インクワイアリー・サークルの段階

上記のインクワイアリー・サークルの原理を具体的な授業として実現させるために、ハーベイとダニエルズは4つの段階(stage)を設定している。

- ・ 浸る(Immerse)・・・好奇心を持つ、背景知識を構築する、話題を見つける、不思議に思う
- ・ 調査する(Investigate)・・・疑問を発展させる、情報を探索する、答えを発見する
- ・ 合体させる(Coalesce)・・・研究をさらに進める、情報を統合する、知識を組み合わせる
- ・ 公にする(Go Public)・・・学びを共有する、理解したことを演じる、行動を起こす

(Harvey & Daniels, 2015, pp.199-120.)

これらは、後述する探究のタイプに関わらず共通して用いられている段階である。公にするのは、自分の教室の中で他のグループに対して発表する場合もあれば、地域の人に発表する場合もある。

(3) 方略とキー・レッスン

これらの段階を経る間に、生徒達は様々な読解・協同・探究の方略を用いる。それぞれの方略を特に指導するために初版では27、改訂版ではさらに増えて40のキー・レッスンが示されている。40のキー・レッスンを表1に引用する(Harvey & Daniels, 2015, p.151)。

表1 方略を指導するキー・レッスン

<p>読</p> <p>解</p>	<p>1 背景知識を活性化し構築すること</p> <p>2 自分の声を聞くこと</p> <p>3 画像について考え、不思議に思うこと</p> <p>4 情報を得るために文章や絵を使用すること</p> <p>5 シグナルとなる語・語句とそれらの目的</p> <p>6 注釈をつけること：考えた足跡を残しておく</p> <p>7 簡単な言葉に言い換えること：内容と考えた足跡の両方を残しておく</p> <p>8 疑問を持ち情報について不思議に思うこと</p> <p>9 立ち止まり考え情報に反応すること</p> <p>10 ノートをとること：疑問を持ちながら読む</p> <p>11 画像、特徴や語から推論を引き出すこと</p> <p>12 意見と知らされた意見を区別すること</p> <p>13 単純または複雑：それはどちらか？</p> <p>14 情報を統合すること：要点獲得のために読む</p>
<p>協</p> <p>同</p>	<p>15 向き直って話すこと</p> <p>16 ホーム・コートのアドバンテージ：親しみと支持を示す</p> <p>17 パリのアクティブ・リスニング</p> <p>18 グループの基本ルールを作ること</p> <p>19 作業計画を作って用いること</p> <p>20 効果的な小グループのディスカッションのスキルを練習すること</p> <p>21 自分はどこに立つか？</p> <p>22 会話を書くこと</p> <p>23 中間軌道修正：熟考と再計画</p> <p>24 失礼だが同意できない：快く異議を示す</p> <p>25 注意深く聞く聴衆になること</p>
<p>探</p> <p>究</p>	<p>26 自分自身の探究過程のモデルを示すこと</p> <p>27 研究を声に出して言うモデルを示すこと</p> <p>28 不思議に思う壁／疑問ボードを挿入すること</p> <p>29 研究ノートを作ること</p> <p>30 多数のソースを使って探究すること</p> <p>31 疑問と不思議に思うこと：小グループで情報と疑問の足跡を残す</p> <p>32 デジタルの注意散漫を扱うこと</p> <p>33 調査話題の選択：自由記述に焦点をあてる</p> <p>34 多くの話題についての探究グループの形成</p> <p>35 ソースをチェックすること</p> <p>36 グループとして結果のまとめ：質問ウェブ作成</p> <p>37 インタビューの実演と練習</p> <p>38 インタビューのガイドラインを構築すること</p> <p>39 ポスターと壁で学習を共有すること</p> <p>40 公にし、行動を起こすための方法の共有</p>

(Harvey & Daniels,2015, p.vi より作成)

もちろん、表1の方略をいつもすべて用いるわけではない。しかし、必ずいくつかの方略は用いることになる。そのことを示すために、実践例について見て行く。

(4) 実践例

この『読解と協同』には、豊富な実践例（プロジェクト例）が示されている。ウェブ（オンライン）提示のものも含め、初版には30、改訂版では37ものプロジェクト例が掲載されている。表2に改訂版のプロジェクト例を示す。ページは改訂版の掲載ページ、オンラインはウェブ上の情報である。どれくらいのレベルの子供（幼児・児童・生徒）に向けたプロジェクトなのかを「グレード」として示す。詳しくは後述するが、それぞれの実践例のタイプについても「探究のタイプ」として表2に示しておく。

これらの実践例では、表1の方略はどのように用いられているのであろうか。例えば、小学校低学年の「南極大陸」というインクワイアリー・サークルでは、1, 3, 8, 11, 34, 40のキー・レッスンが行われている(Harvey & Daniels, 2015, pp. 215-220.)。中学生の「市民権リテラチャー・サークル」では3, 10, 12, 14, 17, 19, 20, 24, 31, 39のキー・レッスンが行われている(Harvey & Daniels, 2015, pp. 261-267.)。

(5) 探究のタイプ

初版でも改訂版でも、探究のタイプを4つに分けている。タイプによってかける時間や、教師の準備の仕方、授業での扱いは変わってくる。表2で挙げた例のいくつかを合わせて示す。

・ミニ探究

ミニ探究は、短時間で小グループを作ってリアリティーのある疑問を調べるといものである。自発的で、無計画で、偶発的である。表2の例では「シングルストリーム・リサイクル」「なぜ、蚊に刺されるとかゆくなるのか」「オエッ！それは吐根だ」などがこれに該当する。

などがある(Harvey & Daniels, 2015, p.vii)。

・カリキュラム探究

カリキュラム探究は、カリキュラムに位置づけられた計画的なものである。例えば、小学校低学年における「南極大陸」という探究では、どんな動物がいるのか、天気はどうか、どのような地理的状況なのかといったことについて子供が調べて、絵に描いたり文を書いたりする活動をしている。他には、「天文学者と宇宙飛行士」「奴隷制と児童労働」「熱帯雨林探究の複雑な問題」「大統領討論」などがある。

・リテラチャー・サークル探究

リテラチャー・サークル探究は、リテラチャー・サークルの中で探究を行うといものである。リテラチャー・サークルをしていると、その中で疑問を持つこと・調べたいことが出てくるものである。疑問がその本の中で解決できない場合、別のツールを使って調べるといのは、自然な活動の流れであろう。表2の例については、我が国でも「お手紙」という教科書教材でおなじみの「がまくんとかえるくんの友情」の他、「いじめ」「市民権リテラチャー・サークル」などがこのリテラチャー・サークル探究にあたる。

・オープン探究

オープン探究は、上記以外の探究で、カリキュラムに関わらず、子供が本当の意味で好奇心を持ったり、不思議に思ったり感じたりしたことを探究するものである。ミニ探究との違いは短時間で調べて終わりというのではなく、疑問が広がったり深まったりし、さらに時間をかけて探究しているものである。表2の例では、「ジェンダーのステレオタイプ」「ごみとリサイクル」「署名と作文の起源」「核兵器」「銃規制」「郵便と王女と城」などがある。

強調しておきたいのはこれらの探究のタイプはそれぞれどのグレードにも見られるということである。決して低い年齢の子供にはミニ探究、高い学年の子供にはオープン探究ということではない。高い学年の子供でもミニ探究があるし、年齢によらず本格的に行うオープン探究は行える。

このようにタイプの違いが明示されることによって、教師の側は、子供の探究活動を支える具体的な仕方が異なってくる。カリキュラム探究であれば、子供達の探究活動がカリキュラム上の学習事項としてどのように子供に意識されているかに注意を払う必要があるし、オープン探究であれば特に「公にする」段階で子供がだれに対してどのような行動を起こすことになるかについてのサポートが必要である。

表2 小グループでの探究プロジェクト

ページ	プロジェクト名	グレード	探究のタイプ
2	ジェンダーのステレオタイプ	小学校高学年	オープン
5	ごみとリサイクル	小学校低学年	オープン
6	世界の半分の子供を救うこと	中学校	オープン
7	偏見と～主義	中学校／高等学校	オープン
119	兵士のための携帯電話	中学校	オープン
125	エドモンドの古代洞窟壁画の調査	小学校低学年	カリキュラム
129	天文学者と宇宙飛行士	小学校低学年	カリキュラム
194	粘着テープ	小学校低学年	ミニ
200	自分の好奇心のモデルと疑問の記録	小学校高学年	ミニ
203	シングルストリーム・リサイクル	小学校低学年	ミニ
207	なぜ、蚊に刺されるとかゆいのか？	小学校高学年	ミニ
208	オエッ！それは吐根だ	高等学校	ミニ
215	南極大陸	小学校低学年	カリキュラム
221	奴隷制と児童労働	小学校低学年	カリキュラム
232	熱帯雨林探究の複雑な問題	小学校高学年	カリキュラム
236	探検家と探検	小学校高学年	カリキュラム
242	砂糖と市民権	中学校／高等学校	カリキュラム
251	がまくんとかえるくんの友情	小学校低学年	リテラチャー
253	いじめ	小学校低学年	リテラチャー
261	市民権リテラチャー・サークル	中学校	リテラチャー
267	中学校と高校のライティング・サークル	高等学校	リテラチャー
278	署名と作文の起源	小学校低学年	オープン
287	オープン探究と研究	小学校低学年	オープン
295	子供の選択によるインクワイアリー・プロジェクト	中学校	オープン
309	冠石・最終学年プロジェクト	高等学校	オープン
316	核兵器	中学校	オープン
オンライン	原住民と入植者の接触	中学校高学年	カリキュラム
オンライン	新しい学校のための提言	小学校高学年	オープン
オンライン	銃規制	小学校高学年	オープン
オンライン	気象学者になること	小学校低学年	カリキュラム
オンライン	大統領討論	高等学校	カリキュラム
オンライン	子供の選択したトピック	小学校低学年	ミニ
オンライン	自選探究	小学校低学年	ミニ
オンライン	チーズから雑誌まで	小学校高学年	ミニ
オンライン	健康と身体システム	小学校高学年	カリキュラム
オンライン	指数関数	高等学校	カリキュラム
オンライン	郵便と王女と城	幼稚園／小学校低学年	オープン

(Harvey & Daniels, 2015, p.vii をもとに作成)

3. リテラチャー・サークルからの発展

このようなインクワイアリー・サークルは、どのようにして生まれてきたのか。筆者は、リテラチャー・サークルから発展したものと見ている。そのことを、経緯、性質、リテラチャー・サークル探究、アメリカでの受け止められ方の4点に基づいて、明らかにしたい。

(1) 経緯

『読解と協同』第一著者のステファニー・ハーベイはリテラシー教育の研究者であり、主に読解方略について研究してきた。一方第二著者のハーベイ・ダニエルズはリテラチャー・サークルだけでなく、他教科(content area)についても協同学習で多くの業績を持っている。書名のとおり、読解と協同は2人のそれまでの業績の延長上に生まれたものである。2人は以前から多くの仕事を一緒に行っており、ダニエルズのリテラチャー・サークルの「役割」がハーベイの読解方略に基づいていることはすでに指摘したとおりである(足立, 2004, p.12)。初版の序文には2人の会話からこの本が始まったことを示す様子が書かれている。

(2) 性質

インクワイアリー・サークルは、サークルという小集団を用いることの他にも、多くの性質をリテラチャー・サークルから受け継いでいる。性質の比較を、上記のインクワイアリー・サークルの概要のうち、原理とキー・レッスンについて考察する。

原理①~⑪のうちの、③グルーピング、④異質グループ編成、⑤児童・生徒の責任、⑥有能な読者、⑦モデリング、⑨考えの統合、⑩共有は、リテラチャー・サークルにも共通する原理である。これらは、上記のハーベイの読解の研究にも、ダニエルズの協同の研究にも当てはまる。①話題や②問題はリテラチャー・サークルにはないものであるが、役割読みをする中で、生徒は自ら話題を提供し問題を掘り下げるので、共通する面もある。一方、リテラチャー・サークルの場合は自分が興味を感じた本を選択していた。ただし、その本は基本的には1冊で、⑧オンラインを含む多様なソースを用いることはなかった。⑪のスタンダードについては、リテラチャー・サークルの開発当時はバランスのとれた指導が重視されていたが、その後の各州共通基礎スタンダードの施行で、より教育内容がスタンダードに適合していることが重視されるようになってきた。このように考察すると、⑧⑪の2点のみが相違点となり、インクワイアリー・サークルにはリテラチャー・サークルと多くの共通点があると言える。

キー・レッスンについては、リテラチャー・サークルのミニ・レッスンとの類似を指摘したい。ダニエルズとナンシー・ステイニクは、リテラチャー・サークルで使用する方略を特に指導する授業をミニ・レッスンと呼び、リテラチャー・サークルの進行中に授業に入れることを推奨していた(Daniels & Steineke, 2004)。キー・レッスンはミニ・レッスンと同じ発想のものと考えることができる。

(3) リテラチャー・サークル探究

4つの探究のタイプのうち、特に3つめのリテラチャー・サークル探究は、実のところリテラチャー・サークル実践から派生している。DVDで挙げられていたのは、リテラチャー・サークルでクリストファー・ポール・カーティスの『バドの扉が開くとき』を選択した5年生の例である。この本は、1930年代の大恐慌下のアメリカのミシガン州フリントが舞台で、黒人で孤児の少年バドが、バンドマンの父親を捜すという物語である。その時の社会状況、なぜバドは孤児にならなければならなかったのか、児童養護施設や里親制度はどのようなものなのかなどについてグループの子供達は疑問を持ち、調べていくのである。DVDの説明書ではハーベイらは「伝統的なリテラチャー・サークルでは教師が会話文を作らせたり、書かれていない場面を書いてみたり、ジオラマを作ったりさせることがあるが、本当の生涯読者はそのようなことはしない。我々はよい本を読み終える時、より多くの疑問を持ち、より調べたくなるのである」としている(Harvey & Daniels, 2010b, p.9)。つまり、リテラチャー・サークル探究は、リテラチャー・サークルをより生涯読者の形に発展させたものと言うことができる。

(4) アメリカでの受け止められ方

アメリカ国内でも、インクワイアリー・サークルはリテラチャー・サークルの発展として受け止められている。英語教師ケイティ・スルターは、リテラチャー・サークルをしていく中で、インクワイアリー・サークルを行っていく必然性が出てきたことを複数の指導経験に基づいて述べている(Sluis, 2017)。12年生で「ペーオウルフ」「マクベス」「フランケンシュタイン」を扱った際には、メンタル・ヘルスについての疑問

が多く挙げた。8年生で歴史フィクションを取り上げた際には、スーダンの難民の少年を扱った本を選んだグループが「スーダンはどこにあるか」という「浸る」「調査する」段階から、少年兵について書かれた本で学んだことを「合体させる」段階を経て、「私達にできることは何か」を考えて発表するという「公にする」段階に至ったことを報告している。

4. インクワイアリー・サークルの意義

このようにインクワイアリー・サークルはリテラチャー・サークルから発展する形で生まれてきた。まずこのアプローチの特徴、次に初版から改訂版への変化について触れつつ、最後に我が国へインクワイアリー・サークルを導入する意義について考察する。

(1) アプローチの特徴

表3は、改訂版の見返しに掲載された、探究するアプローチとカバーするアプローチの比較表である。これは生徒の側から見た授業アプローチの特徴を表したもので、当然インクワイアリー・サークルは、「探究するアプローチ」である。一方、「カバーするアプローチ」とは、教育内容が予め教師の方で設定・計画され、それを網羅的に学んでいくアプローチである。インクワイアリー・サークルは、生徒の声（意見）と選択が重視され、生徒が責任を持ち、リアルな目的でパフォーマンスを行う方法であるということが分かる。

表3 探究するアプローチ VS カバーするアプローチ

探究するアプローチ	カバーするアプローチ
<ul style="list-style-type: none"> ・ 疑問／問題駆動 ・ 生徒の声と選択 ・ 相互交流と話し合い ・ 生徒の責任 ・ 本物の調査 ・ リアルな目的と聴衆 ・ 協同作業 ・ 戦略的思考 ・ 学際的な問題 ・ 多数の情報源 ・ マルチモーダル学習 ・ 学問の道具／手続きを使用する ・ 知識クリエーターとしての生徒 ・ モデル・コーチとしての教師 ・ 気にかけて行動する ・ パフォーマンス評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・ カリキュラム話題駆動 ・ 教師の選択と指示 ・ 静聴 ・ 生徒のコンプライアンス ・ 教師の準備 ・ 単位・得点の蓄積 ・ 孤独な作業 ・ 記憶 ・ 1つの教科の時間 ・ 教科書依存 ・ 言語(verbal)のみ ・ 学問の結果を聞く ・ 情報受容者としての生徒 ・ 専門家・プレゼンターとしての教師 ・ 忘れて次の単元に移る ・ 教室テストと標準化テスト

(Harvey & Daniels,2015, 見返し)

(2) 改訂版への変化

改訂版が初版から何が新しくなったのかについては5点を挙げることができる。

- ① 13のレッスンを追加
- ② 9の探究プロジェクト例を追加
- ③ 州及び国のスタンダードへの関連づけ
- ④ 新しい読解・好奇心・社会的・感情的学習の研究を反映
- ⑤ テクノロジーの章を完全に改編

(Harvey & Daniels, 2015, 裏表紙, 丸数字は引用者)

③が冒頭でも述べた各州共通基礎スタンダードのことである。新しい④研究成果や⑤テクノロジー（ICT）を利用し、①のキー・レッスン（表1掲載）や①の実践例（表2掲載）は増加しているが、このインクワイアリー・サークルの仕組みや流れ自体に変化はなく、③各州共通スタンダードなどカリキュラムへの関連づけを明確にしたものになった。

（3）インクワイアリー・サークルの意義

以上をふまえて、インクワイアリー・サークルを我が国へ紹介する意義を3点述べる。

1点目は、このような経緯・背景が、我が国の状況と似ているということである。改めて学習指導要領の改訂などによって、探究的な学習の必要性が明らかになっている。さらに、COVID-19感染防止及びGIGAスクール前倒し実施など新しいテクノロジーを利用した学習が求められているところである。

2点目は、インクワイアリー・サークルが、リテラチャー・サークルの活動の蓄積の上に、構造的に作られているということである。単なる優れた1つの実践例ではなく、タイプの分類やキー・レッスンの創出など構造的に作られ、しかもそれが新しい研究成果やテクノロジーを踏まえて強固なものに発展してきているということである。

3点目は、インクワイアリー・サークルが、小グループを通した活動であるということである。グループ学習は我が国でも増えてきているが、小グループを意図的に探究に結び付けたものは、まだあまり出てきていない。では、なぜインクワイアリー・サークルは、小グループを通した活動に特化することができたのだろうか。それはやはり、リテラチャー・サークルの発展として必然的に生まれてきたものだからである。表4は、初版の見返しに掲載されていた、小グループで学習する際の生徒側の技能を示したものである。

表4 小グループ協同学習技能

①グループの一員としての責任を持つ	⑤自分の見え方や結果を支持する
②アクティブに聞く	⑥寛容や敬意を見せる
③思ったことを言う	⑦振り返り訂正する
④雰囲気を共有し他の人を励ます	

(Harvey & Daniels, 2009, 見返しより)

インクワイアリー・サークルが、小グループで学習するという点について、多くの蓄積を持っていることが伺える。しかしグループ学習自体が我が国でも増えてきていることを考えると、今後我が国でも行えるのではないかと考える。

以上のように、インクワイアリー・サークルは、生徒の探究したい話題について、ICTを含んだ様々な手段を用いて、最後に発表・公刊するまで小グループで活動する方法である。様々な形（タイプ）があるのでタイプに合わせて、キー・レッスンを入れながら生徒をサポートしていくことができ、これからの学習指導要領に対応できる授業を作ることができるのではないかと期待する。

5. まとめと今後の課題

本稿では、探究を基にした学習の必要性を述べた上で、ハーベイとダニエルズの「インクワイアリー・サークル」を取り上げた。インクワイアリー・サークルの概要を原理、段階、方略、実践例、タイプの5点について説明し、それがリテラチャー・サークルからどのように発展したのかを明らかにした上で、インクワイアリー・サークルの意義を我が国の状況に照らし合わせながら考察した。

リテラチャー・サークルの土壌があることをふまえると、我が国でもインクワイアリー・サークルも、探究的な学習として受け入れられる可能性があると考えている。

しかし本稿では、日本の過去の例との違いを丁寧に検討するところまではいかなかった。今後はそれらの検討を進め、豊富な事例に触れ、我が国でのインクワイアリー・サークルの意味を研究していきたい。

文献

- 足立幸子(2004)「リテラチャー・サークルーアメリカの公立学校のディスカッション・グループによる読書指導方法」『山形大学教育実践研究』13, 9-18.
- Curtis, C., P. (1999). *Bud, not buddy*. New York, NY: Yearling. クリストファー・ポール・カーティス, 前沢明枝訳(2003)『バドの扉がひらくとき』徳間書店
- Daniels, H. (2002). *Literature circles: Voice and choice in book clubs & reading groups*. Portland, ME: Stenhouse.
- Daniels, H. & Steineke, N. (2004). *Mini-lessons for literature circles*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- Harvey, S., & Daniels, H. (2009). *Comprehension and collaboration: Inquiry circles in action*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- Harvey, S., & Daniels, H. (2010a). *Inquiry circles in elementary classrooms*. (DVD) Portsmouth, NH: Heinemann.
- Harvey, S., & Daniels, H. (2010b). *Inquiry circles in middle and high school classrooms*. (DVD) Portsmouth, NH: Heinemann.
- Harvey, S. & Daniels, H. (2015). *Comprehension and collaboration, revised edition: Inquiry circles for curiosity, engagement, and understanding*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- 幸田国広(2020)「総論：探究学習とは何か－ことばの教育の視座から－」幸田国広編（浜本純逸監修）『探究学習－授業実践史をふまえて－』溪水社, pp.3-21.
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』東洋館出版社
- Sluiter, K. (2017). From literature circles to inquiry circles. *The Educator's Room: Empowering Teachers as the Experts*. <https://theeducatorsroom.com/lit-circles-inquiry-circles/> (2020年5月13日閲覧)